

「活きついたら願いの果て」

作 サカイリユリカ

登場人物

女 女優。着物を身にまとっている。

素舞台。

舞台にはロープが縦横無尽に張り巡らされており、そこに絵馬がいくつも吊るされている。

客入れ中、観客には赤い絵馬のような形をした紙をスタッフが配る。そこに、各々の「願い」を書き込んでもらい、その後開演前にスタッフが舞台奥に設けられた絵馬が吊るされているロープに、絵馬を結んで奉納する。スタッフ、そのまま上手にハケる。と同時に舞台、開演。

暗転。

微かに心電図の音が聞こえてくる。

女 看護師さん・・・看護師さん・・・！

明転。

白い着物を着て白い包帯で目を覆われた女、板付き。

女の周りには、桃色の着物と、巻物が転がっている。

女、周りを手探りで探っている。

すると、女が遭った火事のフラッシュバックが起きる――

炎が燃える音の中に救急車の音が混じって聞こえてくる。

女、とつさに身を縮める。

女 嫌・・・やめて・・・来ないで・・・

熱っ・・・(咳き込みながら) 助けて・・・

女、とつさに周りを探り、床を叩く。

フラッシュバックは消え、女は身体の緊張がゆるむ。

女 そうよ、あたしの舞台・・・

女、自分の身体がなんともないか触って確認し、最後に手が顔に行きつく。

女、人の気配を感じ、包帯を外す。

女

(辺りを見渡して)

わあ、綺麗・・・なんだか世界がきらきら、輝いて見えるわ。

(上手を見て)・・・あれ・・・今って、何月何日？

え？1月7日・・・？

そう。なら本番に間に合うわ！良かった！

ほら、話してたでしょ。今度舞台で主演を務めるって。

あたしがどうしても演じたい「八百屋のお七」っていう人がいてね、

江戸時代に恋人に会いたい一心で放火した女なの！

(下手を見て) え？何よ、知らないの？

今から、そうね、300年くらい前の年の瀬の大火事で家が丸焼けになって、

お七は円乗寺という寺に避難したの。

そこで出逢って恋に落ちた相手が、寺小姓の吉三郎。

寺小姓っていうのは、住職の身の回りの世話をする人のことよ。

当時は身分違いの恋はご法度だったから、2人の仲はすぐに引き裂かれ、

それでも会えない日々が想いを募らせて、ますます2人は燃え上がるの。

すごく素敵でしょう？さながらロミオとジュリエットよ。

だからね、劇団の先生にお願いして、わざわざ書き下ろしていただいたの！

あたしの為に！

ああ、あたしの命より大切な・・・先生があたしにくださった言葉。

この衣裳も。

私に、「似合うね」って、先生が選んでくださった着物。

女、誰かの気配を感じたのか、ある一点(下手)を見つめ、

母さん。父さんも。

見て行ってちょうだい。

あたしが今度演じる「八百屋のお七」のシーンよ。

女、立ち上がる。

女、桃色の着物を白い着物の上から羽織り、巻物を開きながら読み始める。

お七

1日(ついでたち)、ついに今日もあなたに会えなかった。

2日(ふっか)、ふっふっ情が煮えたぎり、

3日(みっか)、見つからないよう文を書き、

4日(よっか)、寄っかかる腕も体も隣にはなく、

- 5日（いつか）、恋しき（いとしき）募ります
6日、（むいか）、無理を承知で家を飛び出すも
7日、（なのか）、名の知れぬ私に手を貸してくれる者はおらず・・・

半鐘の音がどこからか聞こえてくる。

また火事だわ。最近多いのね。
でももっと燃えてくれたっていいの。
だって、またあの晩みたいなのに、そこいら中、火の海になって、
私のおうちも燃えてしまえば、あなたのいるお寺へ行けるでしょう・・・？
おうちが建て直されてここに戻ってきてから私、
再会する日を指折り数えているのよ。

ああ、あなたのぬくもりが、日ごとに薄れていく・・・
「神様、どうか吉三さんと逢わせてください」って毎日毎日、お祈りしています。

お七

2月15日。

ひと月、ふた月、み月が経った。夢にすら、出てきてくださらないのね・・・
お寺にいたときも、私は母に見張られていたし、あなたの傍にも和尚さんが目を光らせていたわよね。気づかれないように、あなたの部屋まで行くの、本当に心細かったわ。
夜更けに、みんなが寝静まった闇の中を、
忍び足で一步、また一步と進んでいって。
部屋へ着くころには体の芯まで冷え切った私の手も足先も、
あなたがすぐに温めてくれた・・・。

今の私は籠の中の鳥。父さんと母さんと、家という鎖に繋がれて、
あなたのところまで飛んで行かない・・・。

ああ、早く、あなたの声を、私を撫でてくれる手を、熱い接吻を・・・
みんなみんな、あなたを味わい尽くしたい・・・あの夜みたいに。

ねえ、私は好きよ、ひたすら、好きよ。
でも、あなたは同じ気持ち？

お七

2月20日。

今日、お勝手の準備をしていたら、指先を切ってしまつて、とても痛かつたのだけど、あなたの指を、思い出したわ。初めて会ったとき、あなたの指に刺さっていたトゲを、私が抜いて差し上げたの、覚えてらっしゃるかしら？
男の人の指に触れたのなんて初めてで・・・ずっと指先が、熱かつたわ。
・・・ふふ、同じ指に怪我して、私たち、おそろいね。
父さんは相変わらず、そんな男のことなんて忘れろつて、縁談を進めようとしてくるけれど、私にはあなたがいるもの。

お七

2月25日。

あの分からずや。ごめんなさい。母さんのことよ。
私は母さんの道具じゃないのに。まるで私のことなんて聞いちやくれない。
「お前は器量よしだから、良い殿方のところへ嫁がせてやらなきゃね」、なんて、それは母さんの思う幸せでしょう。私の心はもう決まっているのに。

今日もまた夜半に、火を知らせる半鐘の音を聴いたわ・・・
あなたも聴こえたでしょう？

こんなからつ風の吹く日は、よく燃えるんでしょうねえ・・・
思いだすわ、あの夜のことを。

私にとって火事は、吉三さんとめぐり合わせてくれた、
素晴らしい出来事なの。

胸がざわついて、落ち着かないの。あの鐘の音が、ずっと頭から離れないの・・・
また火事になりでもしたら、私とあなたは、また・・・きつと・・・

お七

2月28日。

真つ暗な空・・・今日は星も見えやしないのね。

でもまた明日、陽が昇るわ。あなたの処にも、私の処にも。
本当はあなたが生きてくれてるだけで、私ね、幸せなのよ。
でも、私、欲張りだから。ごめんね。

ううん、やっぱり謝らない。

私だけのものになりたいの。あなただけのものになりたいの。
いいよね、願っても。

一緒にまた、隣を歩くの。死ぬまで一緒に。

私の脚、と、あなたの脚、と、右、左、右、左、
ちよつと吉三さんたら、歩くのが早いわ・・・

お七

3月1日。

どうしよう。父さんが、勝手に縁談を組んでしまったの。もう準備が整って、あとは祝言の日取りを決めるばかりだと。

ねえ、どうして返事の一つもよこして下さらないの？

家まで来て私を連れて行ってよ。あなたとなら何処へ行くんだってかまわない。ねえ、私ばかりがあなたを好きみたいじゃない。

信じているから。また逢えることを。

でもね、信じるって難しいわ。

こんなに放っておかれて私、気が狂いそうよ。

最近変な噂ばかりが耳に入ってくるの。

・・吉三さんが他の女と恋仲になったとか、

噂でもそんなこと聞くの、耐えられない。

・・あなたは私のなのに。

こんなに私のこと悩ますのは、誰のせい。

あの夜言っただじやないあなた。永遠の契りを交わしたって。

私とあなたは、あの夜からずっと繋がってるんだから。

もう離れられやしないのよ。

お七

3月2日。

・・・・一目お会いできればそれでいいの。

私があなただをどれくらい好きか、教えてあげたい。

見せてあげたい。

このせまっ苦しい胸の内でもがいている想いを、

今夜、あなたに見せるわ。

私のこころを、見てちょうだい。

わたしはわたしの気持ちに、従いたい。そいじやなきや、一生後悔するから。

寒くて凍えそうよ。

今にも、いま・・・！ (お七、立ち上がると同時に巻物を落とす)

お七、白い着物の上に羽織っていた桃色の着物をはだけさせ、丸める。

お七　もう1度、吉三さんに会わせて・・・！

お七、家に火をつける。(丸めた桃色の着物を落とす)

と同時に、火事を連想させる光と音。

その中、お七、自ら鐘を何度か叩く動作。

徐々に照明が暗くなっていく中、お七当てでピンスポットがつく。

お七、白い着物姿で、はりつけにされ、火刑に処される。

女は両脚↓上半身↓顔の順に火刑に処されたお七の最期を身体で追体験する。

お七 吉三さん・・・熱い・・・苦しいよ・・・

ねえ、でも、私。煙になってあなたのところへ飛んでいくから。

お七、はりつけにされたまま静かにほほ笑む。

女、床に崩れ落ちる。

静寂。ゆっくりと暗転。

明転すると、女は病室でもがき苦しんでいる。

女 痛っ・・・身体中が痛い・・・

感覚が・・・おかしいよ・・・

(突如、耳を塞ぎ)

うるさい・・・！ああ、頭が割れそう・・・！！

消えて！もう火事はおさまったんでしょう！？

もう鐘は鳴らさなくていいの・・・！！

(両親が見えていた辺りに視線をやり)

あれ、なんで・・・ねえ、母さん・・・父さん・・・？

どこいつちやったの！？最後まで見てくれたんじゃないの？

女、父母の姿を探して辺りを見渡していると、吊るされた絵馬を見つける。

女、絵馬に書かれていることを一枚一枚読み上げながら、

「家族が元気に過ごせますように」

「舞台女優になれますように」

「好きな人と一生幸せに暮らせますように」

あたしが今まで書いてきた願い事だ・・・

でもこんなところに書いたって、神様は何にもかなえてくれやしなかった。

それどころか、

「娘が夢を諦めて、いい会社に就職できますように」

これは、父さんの願い事。

「娘がさっさとあの男と別れて、良縁に恵まれますように」

これは、母さんの・・・

いくつ人の願いをつぶせば気が済むの・・・？

女、もぎとった絵馬を手で握りつぶし、窓に投げつける。

女、窓に映る自分の顔を見て火傷を負っていることに気が付く。

女、小さく絶叫する。

女 あなた、誰なの・・・あたし、こんな顔じゃ・・・

嫌・・・違う・・・やめて・・・こんなあたしじゃない・・・！

女、絵馬を手あたり次第引きちぎる。そこにはお見舞いの言葉が書いてある。

「早くよくなりますように」

「元気になったらまた一緒に遊ぼうね！」

「舞台絶対成功させるから、安心してね」

なに、これ・・・こんな言葉じゃない。

お七はあたしが演じるの・・・あたしの役を奪わないでよ！！

あれ・・・この字、先生の・・・

「お七は別の人に代役を頼みました。残念でしたね。お大事に。」

なに言ってるの・・・？

先生はあたしだけのためにこの芝居を書いてくれたんでしょ！？

なのにどうして別の奴なんかに、

畜生・・・あたしが演（や）るんだ・・・

あたしのもんなんだよ、その役は・・・！！

女、桃色の着物を抱きしめる。

女、何度も大きく壁を叩く。

やがて、壁に手をついたまま、崩れ落ちる。

泣き崩れているようだが、次第に乾いた笑い声、高笑いに変わっていく。

女は肩を上下させ大きく唾い、心が負の想いに支配され、鬼女へと成り果てる。

鬼女、白衣着物の上に柄物の着物をかぶって広げながらゆっくりと立ち上がっていく。

鬼女

一日（ついたち）、ついに望み果たさんと
二日（ふつか）、ふつつ心煮えたぎり、
三日（みっか）、見つからないよう人を押しのけて、
四日（よっか）、夜風の冷たさに身を縮めながら、
五日（いつか）、いつ叶うのかと待ち構え、
六日（むいか）、無意識に唇噛んで、
七日（なのか）、名乗りを上げた我は・・・我こそが八百屋のお七・・・

鬼女、絵馬を一枚一枚見ながら、

「あの人に不幸が降りかかりますように」

「あの人が失敗しますように」

「あの人が屈辱を味わいますように」

ふふ・・・みんなうらやましいんでしよう・・・？

あたしがあんまり綺麗で、演技も上手くて、先生にも愛されているから、
馬鹿だねえ。こんなひがみ・・・あたしが芸の肥やしにしてやるよ。

鬼女、絵馬に書かれた文字を舌で舐めとる。

あるいは、食べるふりをする。すすったりしても良い。

舐めとって、文字を食べることで、言葉に込めた想いを味わうのである。

（鬼女、絵馬に描かれた文字を舌で舐めとって、）

「この世からいなくなれ」

「先生は私のもの。あんたなんか捨てられる運命」

「劇団のお荷物なんだよ、気づけよ」

「先生に股開いて役もらった能無し女」

鬼女、手当たり次第に絵馬を食べる、を繰り返す。

鬼女

なんだ、こんなもんかい・・・

もつと・・・もつと思ってることあんたろう言ってみやがれ！

こんなところに書いてねえで、直接言いに来たらどうなんだ！

あたしと正面切って闘うのが怖いから、こうやって逃げてるだけなんだろう
が！！

あたしは先生と、本気で良い作品作ろうってぶつかりあってきてきたんだよ。

何もかも投げ出して、お前らにそんなことできんのかよ！
こんな言葉のゴミ捨て場を書いたところで、何も言い返せねえだろ・
あたしを邪魔する奴は、みんな燃えちまえ・・・！

女、羽織っていた着物を後ろに落とす。

・・・父さんも母さんもさあ、あたしのことなんだと思ってるんだよ。
それは間違ってる、とか、お前は何も考えてないとか、
行きたい学校も、やりたい表現活動も、先生との結婚も、何一つ受け入れ
てくれないで、じゃあさ、正解は何なのかほんとに知ってるの・・・？

父さん。女優になる夢を、応援してほしかったのに、全部否定されて、
「父さんなんていなければ良かったのに」って、言っちゃった。
母さん。先生との結婚を、母さんに猛反対されたね。

あんたのためを思って、とか言ってたけど、あのとときのあたし、
「母さんさえないなければ」、って願ってしまったよ。

ねえ、一瞬の願いなのに、あんな形で叶うなんて・・・
あの、元旦の夜。初詣に行った帰りに、あたしは・・・

「あの夜」に時間が巻き戻る。

女　　ただいま。

久しぶりだね。父さん、白髪増えたんじゃない？

やっぱり実家は変わらないなあ。

え？あれ、この机、父さんが作ったの。すごいなあ。

母さん、やっぱりお母さんの作る料理はすごくおいしそうね。

お腹空いてきちゃった。

・・・ねえ、さつき絵馬に、なんてお願い事、書いたの？

いいじゃん、教えてよ。

え？あたしは、もちろん、「家族が一年元気に過ごせますように」だよ。

なんでそんなに驚いた顔してるの？

当然じゃない、大切な家族だもの。

さあ、ほら、お母さんが作ってくれたおせちとお雑煮でも食べましょよ。

冷めちやわないうちに。うん、この伊達巻、すごくほっとする。

あ、今日はね、帰省土産に、日本酒持ってきたのよ。
お父さん、好きでしょう？お母さんも、せっかくだから、3人で呑もうよ。
あたしが注ぐから、ほら、じゃあ、みんな、乾杯。

おりんの音がちりん、と静かに響く。

ふふ・・・よく眠ってる・・・

良い顔してるなあ。

ねえ、父さん。いつか言ってたよね。「自分の幸せは、自分で決める」って。
母さん。あたし、もうすぐ結婚するんだよ。

あなたが毛嫌いしてた、劇団の、先生と。

あたしは、願いをかなえるためなら、なんだってするの。

だから、こうするしかないの。

ねえ、わかってくれるでしょ・・・？あたしの父さんと母さんなら・・・

女、家に火をつける（羽織っていた着物を丸めて落とす）

火事を連想させる音と光。

あたしはお七なの・・・！

今度はボヤでなんてすましてやるもんですか。

父さん、石油ストーブなんて使っちゃだめだよ？

ほら、部屋中油まみれじゃない・・・

母さん、この家、建て直さないとおいてくれてありがとう。

ほら、こんなによく燃えてる・・・

ああ、すごく綺麗だわ・・・

不思議ね、炎って、どうしてこんなに心が癒されるのかしら。

ごほっ、ごぼ・・・（咳き込む）

女、床に落ちていた包帯を拾って、口と鼻を覆う。

熱いね・・・冬なのに、熱帯夜みたい。

ねえ、母さん？

もう分かんないか。

父さん？・・・ああ、もう聞こえてないか。

女、床に落ちていた桃色の着物と巻物を手に取る。

バイバイ。

女、動き出そうとするが、身体が動かない。

あれ、どうしてだろう、身体が、動かない・・・！
早く、東京に行かなくちゃ・・・東京に行って、舞台に立つのよ！
たくさんのお客さんがあたしのお七を待ってる・・・
あぁっ！熱い！嫌、嫌あ！！

女、崩れ落ちる。

暗転。

明かりがつくと、女、白い着物を着て床に寝そべっている。
ゆっくり、体を起こす。

女 あれ、火が、消えてる・・・

あたし、生きてる・・・

どうなるかと思っただけど、あたし、生命力強いんだな。

(着物と巻物に気づいて) このこたちも、無事ね。

女、傍にある桃色の着物と、巻物を抱きしめ、頬ずりする。

・・・自分の命のつかいどころくらい、自分がわかっている。
だから、あたしはこんなところでいつまでも寝てる場合じゃないの。
だって、お七はあたしの役。
あたしが舞台で生きる人生。何が何でも、あたしが表現するんだから。
それがあたしが生きてくってことなんだよ。
父さん、母さん、もう何も言えないでしょ？
これからあたしの生きてく姿、見せてあげるから。

・・・先生。あたしの代わりはいくらでもいるんだね。
あたしのために本を書いてくれたとき、すぐくうれしかった。
でも、先生が書いてくれたこの本は、先生が表現したいお七の物語。

あたしは先生の表現したいことを伝える道具じゃない。

あたしはあたしの言葉で、お七の生き様を伝えてみせる。
あたしの中で、お七は生きてる。台本なんていららない。

女、巻物を投げ捨てる。

(窓を見て) こんな顔になっちゃったよ。

でもね、やけどの跡が残ろうと、これがあたしの顔。

これがあたしの身体。

衣裳なんていららない。

女、白い着物と足袋を脱ぎ、肌襦袢姿になる。

女、桃色の着物を広げ、投げ捨てる。

女 あたしが活きる場所は、舞台の上。ここから見える、風景が好き。

あたしと一緒に、この時間を生きてくれた人たちの、

エネルギーをもらえるから。あたしはもつと力が湧いてくる。

女、客席を見渡して、

女 あたしにしか表現できないお七を、今から生きるから。

生きて生きて、生ききって、

この命の火が消えるまで、あたしは生きていくよ。

女、正座をし、客席に深々と礼をする。

暗転。

終幕――